



2019年6月1日着任

濃 野 永貢子

のうの・えくこ

物質分子科学研究領域
電子構造研究部門 技術支援員

6月より杉本グループの技術支援員としてお世話になっております。以前は別のグループで1年4か月勤めており、その経験を活かしていきたいと思っております。また、研究室の方々のお力添えに感謝し早くお役にたてるように努力したいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

2019年6月1日着任

村 木 めぐみ

むらき・めぐみ

生命創成探究センター
金属生命科学研究グループ 技術支援員

今年の6月から青野グループの技術支援員としてお世話になっております。6年ぶりに触る実験器具に手に汗握りながら、楽しくお仕事をさせて頂いております。まだまだ至らぬ点多くご迷惑をおかけしているかと思いますが、少しでも研究室の皆さまのお役に立てるよう、日々努めて参りたいと思います。よろしくお願い致します。

覧古考新20 | 1988年

分子研では一つの研究グループが大学のそれに比べて小さく、慢性的な研究者不足の状態にあるとよく言われます。私のように物を創る分野の者にとってはこれは極めて深刻な問題でした。しかし、先端実験設備が整っていて、それらを容易に使えたり、研究費獲得に少くとも助教授である我々がさほどエネルギーを使わなくてもよいなど有利な点も数多くあります。したがって、色々な制約はあるにしろ、それらの制約の中でとにかく一流の研究成果を出すことが一流の研究者だという考え方に立って、現在の環境における強みを最大限に活用して行くことが肝要であると思います。

.....

分子研ではこのように小人数の研究グループで仕事をするわけですから、それだけ優れた研究者とチームを組むことが重要であり、このことが研究の成否を決めることにもなりかねません。公募による人事は互いに甘えがなく、人間関係がすっきりしていて私にとっては大変結構に思われました。バックグラウンドの異なる研究者との議論は尽きることなく楽しいものです。若い人にとっても自分のボスが複数できることになり、将来のポジションの獲得にも有利に働くことでしょう。しかし、最も重要なことはキャリアが違っていても、チームを組んだ後では少くとも研究に対するベクトルは同じ方向を向いていることが必要でしょう。興味の対象が一致していなければ、お互いに力を発揮することができません。この点が私が分子研で研究協力者を得る際最も留意した点だったと思います。

分子研レターズ No.19「分子研を去るにあたって思ったこと」(1988年)
高谷 秀正 (京都大学教授)